

槻蔭

志村黙榮

境川時代 昭和九年より昭和十四年

昭和九年初秋初めて赴任した境川小学校

その秋深き頃尋常三年生を引率して

米倉山に遠足、生れて初て俳句

らしきものを作る

子供等を狩り出す声や秋の山

山廬寒夜句三昧には先輩の

先生達と十一年頃より参加した

火の番に塔影纖く曳きにけり

風邪の子の瞳うるめるマスク哉

容色のまだおとろえぬマスク哉

巻頭に選ばれてびっくりした句
賤機や寒禽翔ける山の径

日の御子の避寒におわす日和かな

禍事の去りたる焚火赤々と

境川時代の拾遺

桐咲いて夏来る空の気配かな

梅雨上る雲のこみだれ早苗植う

十一年教え子忽然と逝く二句

雲の峯笹とむらいの行きにけり

法名の童子に暑き夕陽光

下宿の隣の馬死

梅雨の闇灯して農馬病みにけり

谷わたる風のはるけき午睡かな

石和四日市場に須田文誉君を訪れて帰り

渡し舟月供の野菜載せてあり

おぼろ夜や手を置く肩のふくよかに

(俳句三代集入選句 明治・大正・昭和)

春雨の中凝然と佇^タつ娘なり

石和日蓮上人御硯の井戸

行雲や御硯の井に秋惜しむ

昭和十四年立春三枝市治郎様方 下宿先

一宮へ遠足国分寺跡

湯殿窓寒果つ月のまどかなる

梅枝垂り礎石の柱穴^{アナ}に水腐つる

小黒坂所見

ずくを追う童に梅雨幽き大樹かげ

之瀬小学校へ

春雨のバスにゆがめる旧任地

昭和十四年四月六日境川小学校を去り中巨摩郡野

爾後句友なきまま終戦まで句作を絶つ。

誠に残念ながら五カ年の空白あり。

その間一句記憶にとどむ

冴えかえる茶房ひそけく暖爐なる

拾遺

昭和十一年中巨摩郡榊村に病友A先生を訪う

雲影の山畑をゆく暮春か

笹鳴ける藪のこぼれ日君ぞ棲む

ヨクナラヌ
宿厠の友と昼餉や春炬燵

坊ヶ峰にて

故郷は指頭遙かに麦の秋